

平成 29 年度事業報告書

研究所の設立者である大倉邦彦は、『大倉山論集』第8輯（昭和35年7月発行。30周年記念号）において、次のように述べています。「科学文明のみが絶えず進歩して、一方、精神文化の方面はこのまま足踏みの状態を続けているならば、折角発達進歩した科学の力も人間に真の福祉を保証する訳には行かなくなるかも知れない」。大倉邦彦のこの指摘は、現代社会にも共通する、極めて重い課題といわなければなりません。

公益財団法人移行後6年目となる平成29年度（以下「29年度」という。）では、こうした課題意識のもとに策定した次の三つの柱で構成される事業計画に基づき、定款第4条に定める公益目的事業を着実に推進しました。

- ①精神文化に関する研究及びその成果の普及
- ②地域における歴史・文化の研究及びその成果の普及
- ③附属図書館の運営及び図書資料の充実・整備

1 精神文化に関する研究及びその成果の普及(定款第4条第1項第1号)

(1) 実用の学の研究及びその成果の普及

当財団の活動は、精神文化についての学究的な一面とともに、その学問が現実社会の宗教・教育・政治・経済の実地にふれ、よりよき社会への進展に貢献するという一面も備えています。

実用の学の研究では、このような考えのもと、実業家の実学観や文化事業・教育事業等の調査・研究や資料収集を行っています。

当研究所を創立した大倉邦彦は、紙問屋を経営する実業家でした。大倉邦彦は、自分は何のために生きているのか、何のために商売をして利益を上げるのか、得た利益をどのように使うべきかを真剣に考え、そのたどり着いた答えが教育事業や精神文化事業への取り組みでした。大倉邦彦は、これを天から与えられた自らの使命と考え、当財団を設立しました。

今日、海外企業からの影響で、企業のフィランソロピー（慈善活動、社会貢献活動）やメセナ（文化支援活動）などの必要性が叫ばれていますが、日本国内にも古くから神道、儒教、仏教等の教えから派生した社会貢献活動の考えがあり、江戸時代には石門心学に代表される町人道徳も形成されていました。近代日本の実業家の中には、国内外の思想的背景を元に、様々な社会貢献活動をした人物が数多くいます。

29年度は、社会貢献活動で著名な実業家や企業を取り上げ、そうした活動がどのような思想、理念に基づいたものか、いかなる社会貢献をしたのかを研究しました。

その研究成果の一部は、大倉山講演会（附属明細書1頁参照）や、『大倉山論集』第64

輯の特集（附属明細書 2 頁参照）で公開しました。

(2) 東西文化融合の研究及びその成果の普及

日本の近代化と西洋文明の受容は、日本人の価値観や思想に大きな変化を及ぼしました。

創立者大倉邦彦は、国民の教育や人格形成において、日本の伝統文化を学ぶことが基本であると説き、当財団を設立しました。

その一方で、大倉邦彦は上海の東亜同文書院で学んだ経験や、実業家として世界を廻った体験から、東洋文明の枠組みに囚われることなく、西洋文明の学問成果の良いところも積極的に取り入れることを提唱しました。

そこで 29 年度は、近代化が日本人の価値観や思想に与えた影響に着目して研究を進めました。さらに、国際文化人として東洋と西洋で活躍した岡倉天心の研究を進めました。研究成果の一部は、公開講演会で発表しました（附属明細書 1 頁参照）。

(3) 創立者及び研究所関連資料の研究・調査とその成果の普及

精神文化についての科学研究及びその普及活動を行う上で、研究の基礎となる資料を収集・整理・保存することが欠かせません。それを実践することにより、研究及びその普及活動を効率的・効果的に進めていくことができます。

このような考え方に立って、創立者である大倉邦彦の思想や事績、研究所の創設から現代に至る沿革等の調査・研究、資料収集等を継続的に実施しています。

29 年度は、経常的な資料整理作業（附属明細書 1 頁参照）に加えて、特にアナログ音源のデジタル化事業等に取り組みました。

ア アナログ音源のデジタル化事業

当財団では、大倉邦彦を始めとする研究所関係者の肉声を記録したオープンリールテープや各種カセットテープ、SPレコードなどを所蔵しています。しかし、テープ類は劣化が著しく、また再生機器も無くなりつつあるのが実情です。そこで、29 年度は、SPレコード 20 枚とオープンリールテープ 2 本をデジタル化しました。

イ 写真のデジタル化事業

沿革史資料の中には、当研究所設立準備中から今日に及ぶ様々な写真類も含まれています。これらの写真は、当財団の活動内容や地域の様子を知る上で貴重な情報源となります。外部機関よりの問合せや借用依頼も多いことから、この写真類のデジタル化を進めました。

ウ 沿革史資料目録の O P A C 公開

現在整理作業中の沿革史資料は、整理済み資料の目録件数が約 10 万件となり、外部研究者からの問合せや閲覧利用が増えつつあります。

そこで、28 年度より目録データを、図書館情報管理システム「情報館」のデータに順次変換し、O P A C（Online Public Access Catalog＝オンラインで検索可能な図書館蔵書目録）による目録公開を開始するための準備を始めました。29 年度は目録データの一部約

1 万件をエクセルファイルに変換しました。

エ 資料の展示

資料調査や研究成果公開の一環として、研究所資料展を 2 回、企画展示会を 1 回開催しました（附属明細書 3 頁参照）。

(4) 印刷物の編集及び発行・電子情報の発信

当財団では、精神文化の研究成果を広く国民全体に普及し、国民生活の向上充実に役立つように公開する手段の 1 つとして、印刷物や電子情報を提供しています。

ア 研究紀要『大倉山論集』の編集・発行

『大倉山論集』第 64 輯を刊行しました（附属明細書 2 頁参照）。

イ 各種リーフレット等の編集・発行

当財団の活動目的や活動内容の周知を図り、研究成果の公開や普及活動の効果を高めるために、「研究所のしおり」を改訂し、講演会チラシ、展示会チラシ、展示解説等を編集発行しています。29 年度は、新たに大倉邦彦の生涯を紹介するリーフレットを横浜市大倉山記念館指定管理者と共同で 3,000 部編集発行しました。

ウ 電子情報の発信

当財団のホームページ等を活用し、研究成果や講演会、展示会等の情報を積極的に発信しました。また、SNS の活用として、ツイッターによる情報発信も行いました。

当財団のホームページ等を活用し、研究成果や講演会、展示会等の情報を積極的に発信しています。29 年度は新規に『大倉山論集』第 63 輯の内容を PDF（Portable Document Format）で公開しました。また、SNS を活用して、ツイッターによる情報発信も行いました。

2 地域における歴史・文化の研究及びその成果の普及(定款第4条第1項第2号)

(1) 他機関との連携事業

横浜市大倉山記念館指定管理者等の 12 団体・機関と連携して、講演会の開催や資料の貸し出し等を行いました（附属明細書 3 頁参照）。

(2) 講師派遣

悠遊会等の 15 団体・機関からの依頼により、講演、授業、シンポジウム等に講師を派遣しました（附属明細書 3～4 頁参照）。

(3) 依頼原稿の執筆

港北区区民活動支援センター等の 2 団体・機関発行の情報紙等へ 24 本の原稿を執筆し、掲載されました（附属明細書 4～5 頁参照）。

(4) 調査協力・記事掲載等

11月11日、水谷春夫氏のご遺族より絵画の寄贈を受けました。

12月19日、横浜市港北区の大野洋氏の蔵書を整理し、精神文化資料や地域資料の寄贈を受けました。

3月に大泉定男氏のご遺族より大倉邦彦の揮毫や大倉山の写真等の寄贈を受けました。

大倉精神文化研究所や大倉山記念館、港北区などに関する記事執筆の調査への協力や、当財団主催イベント紹介等が、『神奈川新聞』等の17新聞・雑誌・ウェブで、50記事が掲載されました（附属明細書5～6頁参照）。

(5) 見学案内

新羽地区保健活動推進員等の3団体・機関からの依頼により、大倉山記念館や周辺地域の見学案内を3回実施しました（附属明細書6頁参照）。

3 附属図書館の運営及び図書資料の充実・整備(定款第4条第1項第3号)

(1) 図書館の公開

附属図書館は、哲学・宗教・歴史などの入門書から専門図書まで約11万冊を備えた精神文化の専門図書館です。毎週火曜日から土曜日まで週5日間、午前9時30分から午後4時30分まで無料で公開しています。29年度は延べ247日開館しました。（附属明細書6頁参照）。

(2) 資料の収集

精神文化に関する専門的図書資料、特に神道・儒教・仏教関連及び、歴史の専門的資料に重点を置き収集すると共に、入門書・教養書等も幅広く収集・整備しています。収集した資料は、OPACにより公開しています。29年度は新たに1,530冊の図書を収集整備しました（附属明細書6頁参照）。

(3) 専門図書館としての機能充実

当財団は貴重コレクションとして23種類、約40,000冊の資料を所蔵していますが、その大半は他館に書誌情報のデータが無い資料でした。そこで、25年度より、独自に書誌情報のデータ化を進めており、28年度までに14コレクションのOPAC検索を可能にしました。29年度は新たに2コレクションの書誌データの作成を進め、専門図書館としての機能充実を図りました。

ア 貴重コレクション書誌データのOPAC公開

当財団は貴重コレクションとして 23 種類、約 40,000 冊の資料を所蔵していますが、その大半は他館に書誌情報のデータが無い資料でした。そこで、25 年度より、独自に書誌情報のデータ化を進めており、28 年度までに 14 コレクションの O P A C 検索を可能にしました。29 年度は新たに『大倉邦彦旧蔵文庫』（約 3,000 冊）と、『和装本コレクション』（約 7,000 冊）の書誌データの作成を進めました。

イ 公開資料の簡易データの詳細化と、バーコード貼付

当館では、図書館情報システムの導入に際し、短期間で導入することと、運用開始時からより多くの資料の O P A C 検索を可能にすることを基本方針としました。そのために、多くの資料について、書名・著者名の最小限だけ入力した「簡易書誌データ」を使用して運用を開始しました。システム導入後は、簡易書誌データに出版者・出版地・出版年・件名・キーワード等を補足入力した詳細データ化を継続的に進めています。

公開書庫資料の詳細データ化は 28 年度に終了し、きめ細かな検索が可能になりました。29 年度から 10 年計画で、閉架書庫資料約 40,000 件の簡易データを詳細化する作業に取りかかりました。この約 40,000 件の内には、まだバーコードを貼付していない資料が約 19,000 件残されており、29 年度は約 3,400 冊の貼付作業とデータの詳細化作業を行いました。

また、旧分類から新分類(NDC 日本十進分類)への変更作業約 47,300 冊が今年度で終了しました。

ウ 逐次刊行物の O P A C 公開

逐次刊行物（雑誌等）1,200 誌は、これまで O P A C に未対応で、利用するには館内の目録カードで検索するしか方法がありませんでした。28 年度から 2 年計画で行った逐次刊行物の入力作業は 29 年度で完了し、O P A C 検索を可能にしました。

エ 貴重コレクション資料撮影

貴重コレクションは、資料保存のためコピーを禁止しており、複写依頼のあった資料については、司書によるデジタル撮影を実施しています。書誌情報の O P A C 公開を進めたことにより、大学・研究機関・研究者からの複写依頼は 29 年度も 16 件 1,262 枚の依頼を受けました。撮影資料は、『大倉山論集』の岡崎寛徳論文（**附属明細書 2 頁参照**）や、名古屋大学による高木家文書データベースの構築、東京芸術大学音楽部紀要の論文などの研究に活用されました。

オ 和装本コレクションコーナーの整備

これまで、和装本コレクションは閉架書庫の中で一般書の中に混在する形で配架していましたが、保存と活用の便宜を図るため一ヵ所に集約するべく、3 層・4 層の書架 708 段分の資料を移動して、書庫 4 層に和装本コレクション用のコーナーを新設しました。

(4) 全国に開かれた図書館としてのサービスの充実

ア 情報提供機能の充実

当館は、全国でも珍しい精神文化の専門図書館として、専門図書の公開に加えて、レファレンスの情報提供能力の向上が強く求められています。29 年度は東京大学史料編纂所の

見学や、多数の和装本を利用者が直接手に取れるよう公開している立正大学図書館の見学をし、スキルアップと情報交換を図りました。

イ 資料保存のための活動

当館の貴重コレクションの中には、他の図書館には所蔵されていないような貴重な資料が数多く含まれています。そのため、資料を健全な状態で保存していくことが当館の重要な役割の一つです。

29年度は、保存環境の整備として、こまめな清掃や空調管理、書庫入り口の粘着マット使用の実施、簡易ドライクリーニング・ボックスを使用した資料の埃払い、酸性紙の封筒から中性紙の封筒や大型保存箱への移し替え、修理ボランティアによる保存箱の制作作業（「(6) 修理ボランティアによる資料保存活動」参照）などを継続しました。また新たに、虫損や劣化破損している本の修復を開始するための計画立案に着手しました。

(5) 図書館のPR

当館の公益性を高めるために、ホームページの活用、所蔵資料の展示、館内見学（28回390人）の受け入れ、休日臨時開館等を実施するとともに、「図書館パンフレット」を3,000部作成し、来館者や、図書館総合展専門図書館紹介ブースで配布し、知名度アップや利用促進に活用しました。また、日本近代文学館の依頼により広報誌(第280号)に図書館紹介記事を執筆(高崎司書)する等、PRに努めました。

ア ホームページの活用

当館は丘の上に立地しているために、気軽な来館利用が困難であるという不利な条件を抱えています。そのために、利用者からは気軽に閲覧可能なホームページの充実を強く求められています。

そこで、29年度は貴重コレクションのOPAC検索対応を進めると共に、新着図書やおすすめ本の紹介を毎月2回発信し、資料展示・催し物の案内情報を随時更新するなど、ホームページの活用を進めました。

イ 所蔵資料の紹介展示

貴重コレクション等の資料も、資格を問わず誰でも閲覧利用ができるのが当館の特徴ですが、閉架書庫内に配架してあるために、通常は目にする機会がありません。そこで、29年度は図書館資料展を3回開催して、貴重コレクションを紹介しました。

また、大倉山講演会等に連動させて、イベントの広報を補完するためと、参加者が内容理解を深め知識を広げられるようにすることを目的として、ミニ展示を9回開催しました(附属明細書9～10頁参照)。

ウ 大倉山記念館や地域の行事に連動したイベント

当館は、誰でも閲覧や貸し出しができる公共の図書館としての機能も有しています。11月の大倉山秋の芸術祭や2月の大倉山観梅会、大倉山記念館オープンデー等地域に根差したイベントの開催に合わせて、当館のPRを行い、地域住民の利用者掘り起しと触れ合い

の場となるよう、計5日間臨時開館し、併せて港北の伝統行事体験や大型本の展示をしました（附属明細書8頁参照）。

(6) 修理ボランティアによる資料保存活動

27年度より開始した修理ボランティアによる資料保存活動は、中性紙の保存箱作成を中心に、傷んだ資料の簡易修理・補修等を行うなど、貴重資料の保存に大きな成果を上げています。

29年度は、6人のボランティアが毎月2回の作業を行い、中性紙の保存箱135個を作成し、「古文書古記録影写副本」「貴重書コレクション」の酸性紙ケースを入れ替えました。

(7) その他

学生ボランティアの受け入れ

昭和女子大学国際学部英語コミュニケーション学科の地域ボランティア活動授業を受入れ、延べ20人の学生に英語資料のリスト作成作業を体験してもらいました。